

日本語における読書が英語習得に及ぼす影響

—EFL学習者とのインタビュー分析より—^{注1)}

吉田 安曇

1. はじめに

近年、加速するグローバル化にともない、「世界共通語」としての英語の果たす役割に注目が集まっている。日本でも、英語の早期教育が叫ばれ、英語熱がますます高まっているが、幼少期に英語を始めるより、思考力・分析力の基礎が固まるのを待って、英語学習を始める方が圧倒的に効率的だとする主張もある（大津、2007）。また、斎藤（2007・2017）は、母語能力を超える外国語能力などない以上、外国語学習にはまず高度な日本語運用能力を身に付けることが必要だと述べている。確固たる母語能力の構築には、読書の果たす役割が大きいと考えられる。読書を推進する活動については、日本の小学校などでも様々な試みが行われている。一方、イギリス等英語圏の国々でも、特に若い世代における国語力、すなわち英語の乱れが憂慮されており、近年読書の大切さが再認識されている。

日本では、英語教育の低年齢化が進んでいるが、英語を学び始めるのが早ければ早いほど、英語習熟度が高くなるのだろうか。それよりも、母語である日本語能力をしっかりと身に付けることこそが大切なのではないだろうか。本研究では、日本語での読書が高度な母語運用能力を築き、それが外国語としての英語習得においても有意な影響を及ぼすことを、アンケート調査およびインタビュー分析を通して明らかにしていく。

2. 先行研究

本研究の関連分野における先行研究は、主に以下の3つのタイプに分類できる。すなわち、①日本国内における読書に関する研究、②日本語と英語（外国語）の相関性に関する考察、③外国における母語教育および読書活動に関する研究、である。①に関しては、猪原（2016）が992名の日本人小学生児童にアンケート調査を実施し、読書量と語彙力・文章理解力などの言語力は正の相関を持つということを実証した。②については、齋藤・斎藤（2004）が、英語を訳すという学習は、優れた思考訓練・言語訓練となり日本語力の向上を助け、また翻訳によって鍛えられる日本語での論理的理解能力を英語習得に役立たせることができると論じている。また、三森（2003）は、日本語も外国語もどちらも言語である以上、その運用技術は普遍であり、日本人が外国語を学ぶときは、日本語でまず言語技術を学ぶことが近道であると述べている。③においては、山本（2006）が、英語力のレベル低下を防ぐため、国語教育の強化を推進しているイギリスの例を紹介している。イギリスでは、子どもたちの読書活動を促進すべく、様々なイベントを実施している。そのうちのひとつが、リーディングマラソンと呼ばれるもので、これは子どもが読みたい本を宣言し、読了したら周りの大人たちから寄付金をもらえるという一種のチャリティーイベントである。また、アメリカ合衆国においても、特に若年層の読み書きの能力の低下が憂慮されて久しく、大学で長く使われてきた題

材を満足に理解できたのは、高校卒業者のわずか5%であったという(Healy, 1990)。また、この一因としては、国民の読書離れが指摘されている。

この他にも、斎藤(2000)による明治期に活躍した「達人」の英語学習法に関する伝記的な考察や、現代の「達人」とのインタビューから英語あるいは外国語学習法について分析した竹内(2007)や那須(2015)によるオーラルヒストリー研究などがある。しかし、上記の研究は、日本語による読書が英語習得に及ぼした影響については言及しておらず、また現代のEFL学習者の生の声を聞き質的に分析した例としては、依然として数が少ないのが現状であり、その点において本研究の意義があると考えられる。

3. 研究目的と手法

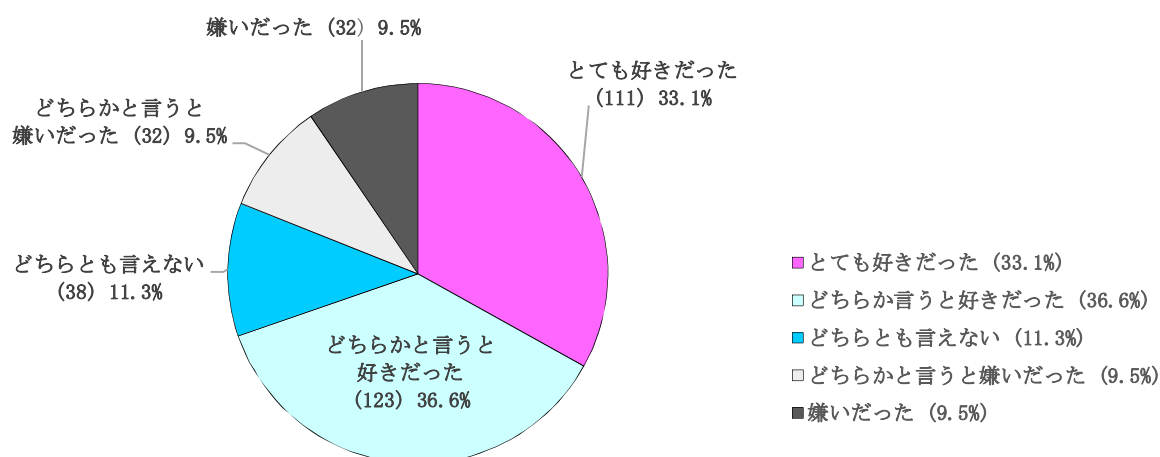
本研究の目的は、幼少期の日本語による読書が確固たる母語能力を構築し、その堅固な日本語力が外国語としての英語の習得にも有意な影響を及ぼすのではないかという点について、EFL 学習者とのインタビューを質的に分析することにより検証していくことである。具体的には、①幼少期の日本語による読書は、高度な日本語力の獲得にどのような影響を与えているか ②日本語能力は英語学習にどのような影響を及ぼしているか、という2つのリサーチクエスチョンについて分析・考察する。

研究手法としては、近年英語教育関係などで広く用いられている質的研究と量的研究を組み合わせた混合法(Dörnyei, 2007)を採用した。まず、大学生326名、一般社会人10名、計336名を対象に幼少期の読書体験や現在の英語力に関するアンケート調査を実施し、うち17名(主に、幼少期よく読書をしていて、なおかつ今現在英語が得意だと回答)と個別インタビューを行った。インタビューでは、読書体験の具体的な内容、小・中学校時代の国語や英語の成績、国語力と英語運用能力の関連性の有無、さらには自身の英語学習に関する考え等について尋ねた。アンケート調査の結果については次章で、またインタビューの分析結果については第5章で詳しく述べる。

4. アンケート調査

本研究では、326名の大学生(文系246名、理系80名)と10名の社会人、合計336名を対象にアンケート調査を実施した。質問項目に関しては、松本(2016)などを参考に作成した。アンケートの結果、336人中234人(69.7%)が、「幼少期、読書がとても好きだった」・「どちらかと言うと好きだった」と回答した(Char 1を参照)。

Chart 1 Q : 幼少期・小学生の頃、読書は好きでしたか？ (n=336)



また、幼少期、読書が「とても好きだった」「どちらかと言うと好きだった」と回答した人にどのような本を読んでいたのか尋ねた。絵本や日本の小説などが人気である一方、新聞やドキュメンタリーなどのノンフィクションはあまり読まれていなかったことが分かる。結果は、Table 1 にまとめている。

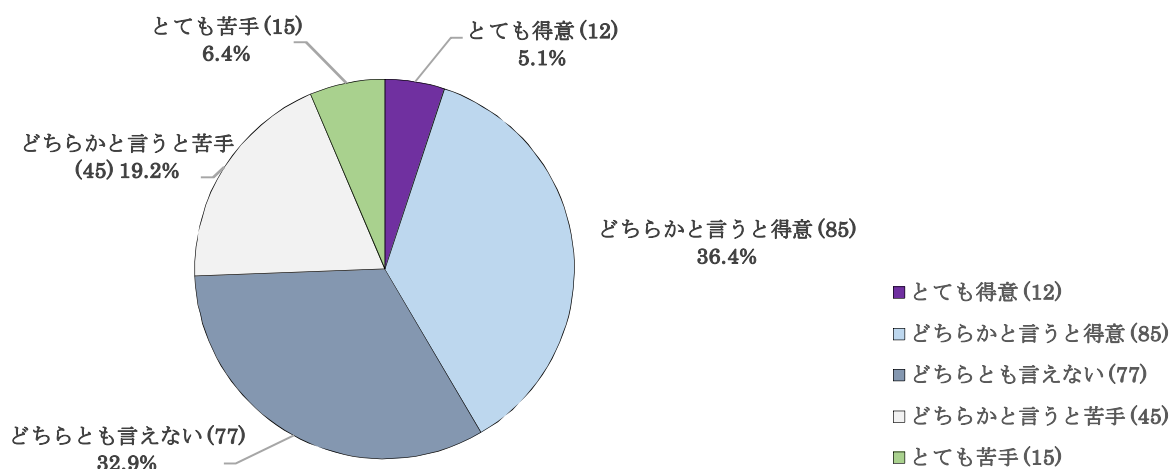
Table 1 幼少期、好んで読んでいた物 (n=234、複数回答可)

絵本	124	海外の小説	66
漫画	117	世界の昔話	47
伝記	88	海外の推理小説	28
図鑑	71	雑誌	36
日本の小説	163	新聞	16
日本の昔話	63	ドキュメンタリー	12
日本の推理小説	74	その他	10

同234名に「今現在、英語は得意ですか？」と尋ねた結果は以下の通りである (Chart 2 を参照)。

Chart 2 Q: 今現在、英語は得意ですか？ (n=234)

対象：読書が「とても好きだった」「どちらかと言うと好きだった」と回答した人



次に、「幼少期、読書が好きでしたか？」という質問に対し、「どちらとも言えない」「どちらかと言うと嫌いだった」「嫌いだった」と回答した人に、「今現在、英語は得意ですか？」と尋ねた結果を以下に記す (Chart 3 を参照)。

Chart 3 Q: 今現在、英語は得意ですか？ (n=102)

対象：読書が好きかどうか「どちらとも言えない」「どちらかと言うと嫌いだった」「嫌いだった」と回答した人

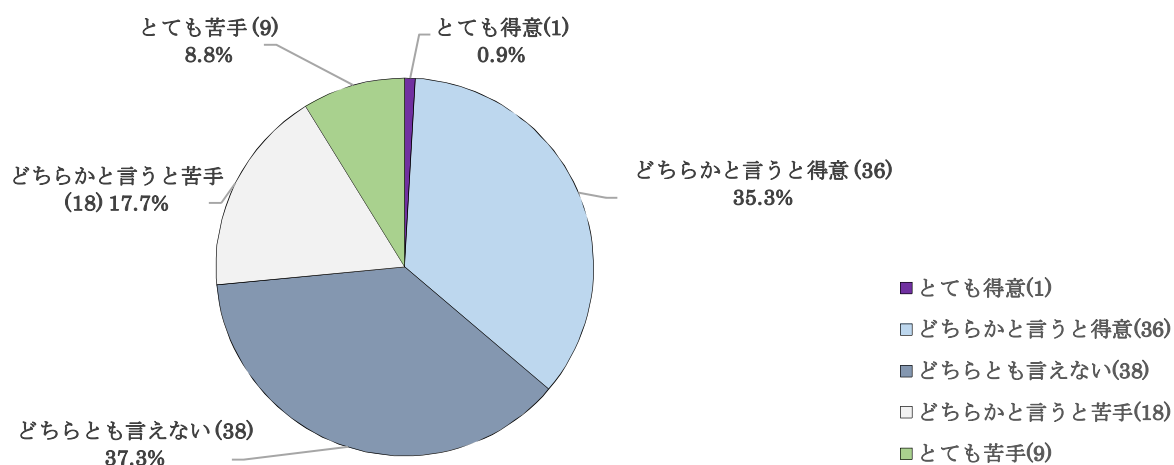


Chart 2 と3 を比較した結果、幼少期読書が好きだったと回答した人の方が、そうでない

人と比較して、現在英語が得意になっている割合が高いことが分かり、それは特に、「とても得意」と回答した人の割合に顕著に表れている。その一方、「どちらとも言えない」と回答した人は、「読書好き」グループ、「あまり好きではない」グループのどちらの場合にも多く見られ、よって両者の違いが明確に表れているとは言いがたい結果になった。しかしこれは、積極的に英語が得意だと言うことへのためらいや、はっきりとした回答を控えたいという心理が両グループに共通して影響しているものと考えられる。

Chart 2 において、「とても得意」「どちらかと言うと得意」と回答した97名と、Chart 3 において、「とても得意」「どちらかと言うと得意」と回答した37名に、英語のどの分野が得意であるか尋ねた結果は、それぞれ以下の通りである（Chart 4・5 を参照）。

Chart 4 Q: 英語のどの分野が得意ですか？ (n=97、複数回答可)

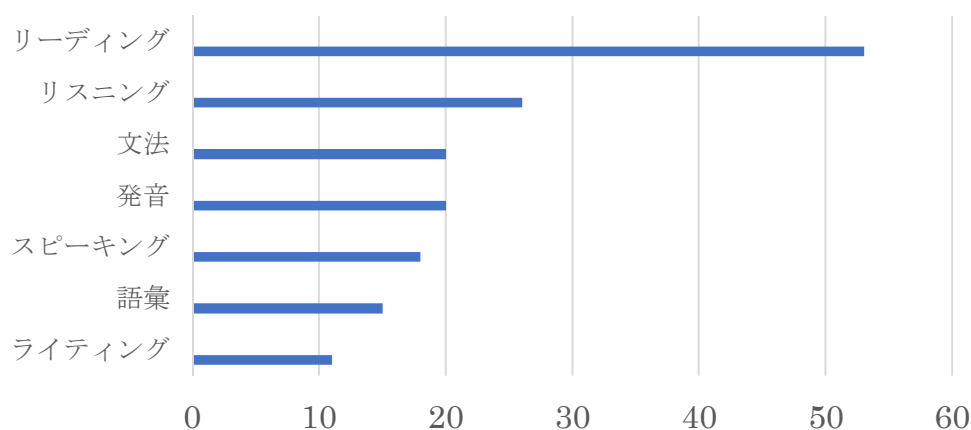
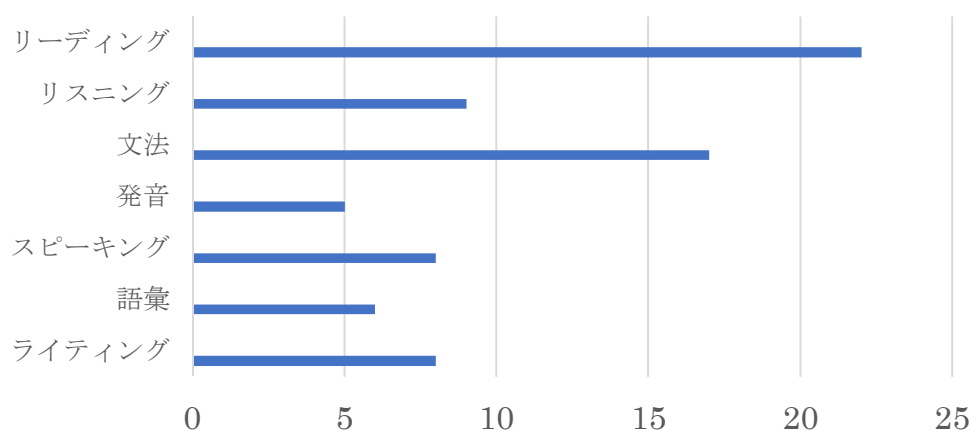


Chart 5 Q: 英語のどの分野が得意ですか？ (n=37、複数回答可)



この結果を見ると、読書が好きだったグループ、そうではないグループ双方において、リーディングが得意である人の割合が最も高いことが分かる。日本語による読書の影響がリー

ディングにほとんど現れていないのは意外な結果と言えるかもしれない。しかしながらこれは、幼少期の読書による影響というより、日本の中学・高校における英語教育、あるいは日本人の英語学習スタイルに何らかの要因があると言えそうである。また、Chart 5 において、文法が得意だと答えた人の割合が比較的高くなっている。日本語の読書が分野別の英語スキルに与える影響に関しては、今後の重要な研究課題であり、また別の機会に議論していきたい。

5. インタビュー分析

インタビュー分析に際して、本研究では内容分析法を用いた。寺下（2011）によると、内容分析法とは、テキストのある特定の属性を客観的に同定し、推論を行うための方法である。また同時に、質的なデータの意味を体系的に記述するための方法であり、質的データの分析手法として容易で使いやすいことが利点として挙げられる（乙幡、2014）。本研究で行った分析の手順は、①Transcription（インタビューデータのテキスト化）、②Data Segmentation（データの切片化）、③Coding（切片にコードを付する）、④Categorization（概念をカテゴリー化する）である。

インタビューは、アンケート結果を精査し幼少期の読書と現在の英語力との相関性が認められそうな回答者をピックアップしたのち、さらに幼少期の読書体験や英語学習についてより詳しく検証するため、インタビュー協力に同意してくれた17名と個別に実施した。インタビュー協力者の基本データは以下にまとめている（Table 2 参照）。

Table 2 インタビュー協力者の基本データ

	学 年 / 職 業	TOEICスコア	性別	幼少期、読書が好きでしたか？	今、英語が得意ですか？
A	国立大学2回生（文）	535	男	とても好きだった	どちらとも言えない
B	国立大学2回生（文）	545	女	どちらかと言うと好きだった	どちらかと言うと得意
C	国立大学2回生（文）	550	女	どちらかと言うと好きだった	どちらかと言うと得意
D	国立大学2回生（理）	660	女	とても好きだった	どちらかと言うと得意
E	国立大学2回生（理）	675	女	とても好きだった	どちらかと言うと得意
F	国立大学2回生（理）	720	男	どちらかと言うと好きだった	どちらかと言うと得意
G	公立大学2回生（理）	770	男	とても好きだった	どちらかと言うと得意
H	公立大学2回生（理）	650	男	とても好きだった	どちらかと言うと得意
I	公立大学2回生（理）	680	女	とても好きだった	どちらかと言うと得意
J	国立大学3回生（理）	780	女	とても好きだった	とても得意
K	公立大学4回生（文）	865	女	どちらかと言うと嫌いだった	どちらかと言うと苦手
L	国立大学4回生（理）	875	男	どちらとも言えない	どちらかと言うと得意
M	公認会計士	910	男	とても好きだった	とても得意

N	国立大学講師	—	女	とても好きだった	とても得意
O	国立大学講師	900	女	とても好きだった	どちらかと言うと得意
P	国立大学講師	990	女	とても好きだった	どちらかと言うと苦手
Q	国立大学准教授	(TOEFL 630)	女	とても好きだった	どちらかと言うと得意

5. 1 読書習慣のきっかけ

17名とのインタビューによると、彼らが読書習慣を獲得したきっかけは大きく2つのパターンに分けられる。まず、両親や家族が読書好きだったり、よく読み聞かせをしてもらった、家庭に文学全集があったなど、家庭での環境が影響している場合と、自宅近くに図書館があったり、学校での朝読書活動など、地域や学校での環境が影響した場合である。以下にインタビューの一部抜粋を記す。

- ・朝読書で読んだ本とかを、また放課後とか図書館行って読んだりして、けっこう小学生にしては読んでた方だったかなと思います。(A)
- ・父が読書好きだったんですよ。だから、例えばおもちゃはそんな頻繁に買ってくれないけど、本屋さんだったら好きな物買っていいよって言われて。(B)
- ・母がこの本お薦めだよって言ってくれたり、あとは小さい頃にけっこう読み聞かせをしてくれてたので、多分その影響もあるかなと思います。(D)
- ・母親が最初に絵本を借りてきてくれて、それを一緒に読み聞かせてもらうところから始まったっていうのが読書の記憶だったんですけど。(中略)で、定期的に親にも図書館に連れて行ってもらって、そこでどちらかというフィクションの小説とか読んだ感じですかね。(F)
- ・両親が教員だったんで、ちょっと本に触れる機会は多かった。家族も本を読む習慣があるから。(G)
- ・自分の家が、ゲームが禁止やっ。その代わり、本は自分の好きな物はどんな物でも買ってもらえたので。(H)
- ・母も父も読書が好きなんですけど、(中略)父がよく言ってたのが、とにかく本を買うお金だけは、ケチるなって。(N)
- ・40年代、小学校の時を過ごした者とかっていうのは、百科事典がけっこう家庭の中に入ってきた時代だと思うんですね。で、世界文学全集と百科事典とか、

そういう物に触れることが多かったかと思います。(Q)

以上のインタビュー結果から、読書を好きになったきっかけとして、家族も読書が好きであったり、教育方針として読書を推進していた、あるいは絵本などの読み聞かせを習慣的にしてくれたなど、家庭での影響が非常に大きいことが分かった。また、地域や学校の図書館によく通っていたり、全国的に広まってきた朝読書も児童の読書活動の推進に一役買っているようである。

5. 2 読書によって培われた国語力

17名のインタビュー協力者の多くは、アンケートで幼少期読書が好きだったと回答しているが、うち14名が小・中学校時代は国語や作文が得意で成績も良かったと語っている。以下にインタビューの一部抜粋を記す。

- ・国語は一番得意だったと思います。(作文は)あんまり苦ではなかったです。読書感想文で、郡の特選に選ばれたのとか。(E)
- ・今、理系に進んでるんですけど、多分文系科目の方が点は良かった。(中略)国語得意でした。(G)
- ・理系には進んだんですけど、ほんとに国語が一番得意ではあって。(中略)文章書くのが得意なんで。(I)
- ・国語で困ったことはないですね。なんか、小説とか書いてましたね、小学校の時。日記を書くっていう宿題があったんですけど、日記がつまらないと思っていて。(P)
- ・大人がどうやったら喜ぶような作文なのかっていうのが何となく分かってて。(中略)小学校5、6年生の時に成功した経験を書いたら、入選して新聞に載ったことがあって。全部が事実じゃなかったなあって今では思うんですけど、それって、なんか物語のパターンなのかな。(Q)

このように、幼少期よく読書をしていたことと、小・中学校時代の国語の好成績には、有意な影響が認められる。また、17名のインタビュー協力者のうち10名については作文も得意だったと話しているが、これはよく読書をしていたことで文章の構成力や表現力などが養われ、作文能力に影響を与えたのではないかと推測される。

5. 3 日本語力と英語力の関係

では、インタビュー協力者たちは、国語力と英語力の相関性についてどう感じているのだろうか。英語を学習する際に、自身の日本語能力がいかなる影響を与えたかについて、以下インタビューの一部を抜粋する。

- ・外国語の表現をどう母国語で表現するのかっていうのは、やっぱり母国語の素養がないとできないかなって思うので。(A)
- ・英語を日本語訳するにも、やっぱり語彙力がないと文章作れないし、多分日本語をどれだけ知ってるかで英文も変わるんかなって。(C)
- ・(英語の学習にとって、日本語力は) けっこう大事だった。それにけっこう頼ったなっていうのはありますね。(中略) 日本語でうまく伝えられないことを、英語で伝えるのは多分無理かなって思うんで。(D)
- ・例えばちょっと並び方が違ったり、ちょっと単語が違ったら意味が全然違うことって日本語でもあると思うんですけど、その感覚がない人は、第二言語でもできひんよねって感じ。(M)
- ・日本語力がないと、英文も日本文も作れないので。やっぱりそのベースになる物は、母国語の力だと思いますね。(高い日本語能力をつけるには) インプット量と、それから、あとまあ、どれだけ書く。読むだけでもダメなんでしょうね、きっとね。いろんなものを出していくっていう作業。(P)

このように、母語としての日本語の語彙・表現・文章構成力などが、英語を学習する際に役に立ったと実感している人が多いことが分かる。また、高い日本語能力を獲得するためには、単に読書というインプット活動のみならず、自分でも書く練習をし、アウトプットトレーニングを積むことが不可欠であるという指摘は、非常に示唆的である。このようなアウトプット作業が、高い作文力にも繋がると言えるかもしれない。

5. 4 日本語での読書の意義

次に、日本語での読書が学習全般やインタビュー協力者の生活にどのような影響を与えたのかについて見ていく。以下、インタビューの一部抜粋を記す。

- ・あんまり文章読む習慣がなかったりする子は、読んでる途中で飽きちゃうとか、(中略) やっぱり読み慣れてる子は、まあある程度文字読んでても、そんなに苦痛じゃない。(G)
- ・想像力、こう、相手の気持ちを考えてみたりとか、思考力っていうのは、いろん

なこと考えられたりするものでいいかなって。(H)

- ・細かい、僕は。言葉について。意味も、語彙も、使い方も、めっちゃ細かいと思います。今、仕事してても、なんか僕は感覚的に文書の中で間違いがあったら、パッと見て引っかかるんですよ。(M)
- ・本に印刷された物って、推敲されて、練られた、非常に研ぎ澄まされた言語表現だと思うんですよ。それは、小説に限らずに、何か説明文であっても、何であっても。美しい、きちんとした形、整った物に多く触れるっていうことは、非常にいいお手本だったかと思います。(O)

上記のコメントから、読書とは想像力や言葉に対する繊細さを養ったり、読むということへの抵抗感をなくし、美しい文章に慣れ親しむことを可能にするものと言えるかもしれない。次に、読書のどのような側面が英語学習に役立ったと考えられるのか、インタビューの一部抜粋を以下に記す。

- ・英語で分からない、読んでて分からないところあっても、文脈的にこうかなって推測することはできるんで、そこは関係あるかもしれないです。(E)
- ・けっこう文章量は読んできたので、その、推測ができる国語力が(英語の)読解に生きてるのかなと思ってるんです。(I)
- ・本を読んできたりとか、国語に対しての関心が強くなかったら、英語も多分そこまで、(中略)入れ込んで、言葉の意味を大事にしてっていうことはなかったかなって思います。(J)
- ・小学生の頃から、ずいぶん難しめの小説とか、論説文なんかも読んでたんですね。そういったことが、論理的に文章を理解する、処理していく、前後の文脈から知らない単語の意味を推測するとか、そういったスキルが、もしかしたら英語の読解にもつながっているのかなっていう気はします。(O)

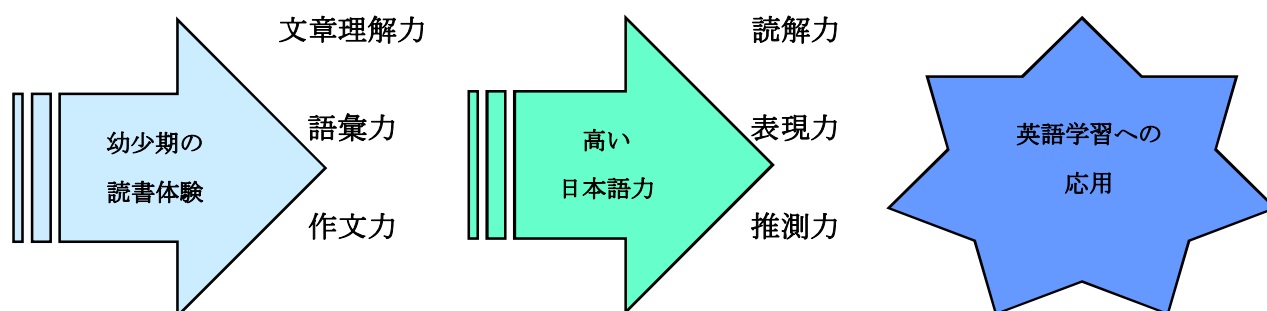
日本語での読書が母語の言語感覚を鍛え、ひいては英語を読み・聴きする際にも、次の展開を推測する力や適切な語彙・表現を選択できる能力に繋がっていると考えられる。また、読書が、日本語・英語にかかわらず文章処理能力をも育成するものと推測できる。

6. 考察

第4章のアンケート調査では、幼少期、読書が好きだった人の方が、現在英語が得意である人が多いことが分かった。また、第5章のインタビューの内容分析により、幼少期の読書

が国語の好成績に繋がったこと、あるいは日本語での作文が得意だったことにも有意な影響を与えていると推測できる。また、インタビュー協力者自身も、読書体験を通し日本語に対する正確さや繊細さ、豊かな想像力などが培われたと実感しており、また自身の日本語力が、英語を学習する際、例えば前後の文脈から意味を推測したり、英語を学習する上での表現力・文章理解力などに影響を与えてきたことを自覚している。以上の点を踏まえ、日本語での読書が国語力を相対的に高め、その堅固な日本語力を基盤にして英語学習を効率よく行い、高い英語習熟度を得られるのではないかと示唆できる (Figure 1 参照)。

Figure 1 日本語能力を活用した英語習得モデル



7. 結び

本研究で提示した二つのリサーチクエスション、すなわち、①幼少期の日本語による読書は、高度な日本語力の獲得にどのような影響を与えているか ②日本語能力は英語学習にどのような影響を及ぼしているか、についてであるが、インタビュー協力者の多くは、幼少期の読書体験により、母語での語彙力や表現力、読解力や文章作成能力を十分に習得できたことが分かる。また、「お手本」となる「美しい」日本語に多く触れたことにより、言葉に対する繊細さや正確さを身に付け、また読むこと自体に対する抵抗感も薄いと言えるであろう。さらに、自身の国語能力の高さが英語を学習する際、例えば、長文読解などにおいて次の展開を読む推測力や論理的な文章処理能力、英作文における的確な表現の選択や文章構成などの点においてプラスの影響を与えてきたと自覚している。これらの結果から、日本語での読書が高度な母語運用能力を築き、それが外国語としての英語習得においても有意な影響を及ぼすことが、一定程度立証できたものと推測される。

もちろん、インタビュー協力者のすべてが日本語での読書が英語学習に役立ったと語ったわけではない。なかには、日本語と英語は言語として非常にかげ離れており、互いの言語能力に相関性は見いだせないと言う協力者もいる。今後は、日本語による読書と英語習得の関連性をさらに検証していくためにも、さまざまなバックグラウンドを持つより多くの学習者とのインタビューを試みていきたい。

2020年には新学習指導要領が実施され、外国語で多様な人々とコミュニケーションを図ることができる基礎的な力を育成するという名目のもと、小学5、6年生は外国語(英語)を教科として学習することになる。しかし、このような指導方針は「的外れの英語教育改革が

繰り返され、行き着いた先は教える人材の確保も不十分なまま見切り発車する小学校での英語教育（鳥飼、2018）」であると危惧する声も聞かれる。本研究も、早期英語教育一辺倒に警鐘を鳴らすものである。幼少期の読書の重要性を再認識し、母語、すなわち日本語力をしっかり養いながら、いわば言語脳を育成し、またその堅固な日本語での思考力、推測力、表現力などを駆使し将来の外国語学習に備えるというスタンスを奨励したい。

注

1) 本稿は、岡山英文学会第41回大会にて行った口頭発表「日本語の読書体験が英語学習に及ぼす影響についての検証」の内容に、加筆・修正を施したものである。

引用文献

Dörnyei, Z. (2007) *Research Methods in Applied Linguistics: Quantitative, qualitative, and mixed methodologies*. Oxford: Oxford University Press.

Healy, J. (1990) *Endangered Minds: Why our children don't think*. New York: Simon & Schuster.

猪原敬介 『読書と言語能力』 京都大学学術出版会、2016

大津由紀雄 『英語学習 7つの誤解』 日本放送出版協会、2007

乙幡美佐江 『ソーシャルワーク研究における質的内容分析法の適用』 社会福祉学評論、第13号、1-16、2014

齋藤孝・斎藤兆史 『日本語力と英語力』 中央公論新社、2004

斎藤兆史 『英語達人列伝』 中央公論新社、2000

斎藤兆史 『これが正しい！英語学習法』 筑摩書房、2007

斎藤兆史 『めがせ達人！英語道場』 筑摩書房、2017

三森ゆりか 『外国語を身に付けるための日本語レッスン』 白水社、2003

竹内理 『「達人」の英語学習法』 草思社、2007

寺下貴美 『第7回 質的研究方法論－質的データを科学的に分析するために－』

日本放射線技術学会雑誌、第67巻4号、413-417、2011

鳥飼玖美子 『英語教育の危機』 筑摩書房、2018

那須雅子 『「達人」の外国語学習履歴に関する質的研究：外国語学習のオーラルヒストリー分析』 *JAILA Journal*、第1号、73-82、日本国際教養学会、2015

松本真治 『文学と語学教育－佛教大学英米学科1回生対象の意識調査の分析(6)－』

英文学論集、第24号、20-47、佛教大学英文学会、2016

山本麻子 『ことばを使いこなすイギリスの社会』 岩波書店、2006